

## 前青年期における自己概念と自己評価感情の 揺れおよび高さとの関連

原田 宗忠\* 中井 大介\*\* 黒川 雅幸\*\*

\*心理講座

\*\*学校教育講座

### Baseline Instability, Level of Self-esteem and Self-concept in Early Adolescence

Munetada HARADA\*, Daisuke NAKAI\*\* and Masayuki KUROKAWA\*\*

\*Department of Psychology, Aichi University of Education, Kariya448-8542, Japan

\*\*Department of School Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

#### 要 約

本研究は、前青年期にあたる小学校高学年から中学校における自己概念と自己評価感情の揺れおよび高さとの関連を明らかにすることが目的であった。小学校5、6年生505名（男子261名、女子244名）、中学校1～3年生947名（男子465名、女子482名）の計1,452名を対象に、3か月間を空けて縦断的な質問紙調査を実施した。小学校高学年男子では、肯定的自己概念の領域数が多い群では、社会基準－肯定的自己評価感情が揺れにくいという結果が得られた。また、女子中学生では、否定的自己概念領域数が少ない人の中で、肯定的自己概念領域数が多い群で社会基準－肯定的自己評価感情が揺れにくいという結果が得られ、緩衝仮説を実証した。男子中学生において、否定的自己概念延べ数が多い群では、社会基準－否定的自己評価感情は揺れやすかった。肯定的自己概念領域数と否定的自己概念領域数の相まった影響についてはみられなかった。自己像の不安定性と個人基準－肯定的自己評価感情の揺れ及び個人基準－否定的自己評価感情の揺れとの間には関連がみられなかった。前青年期における発達段階や性別の違いによる自己概念と自己評価感情の結びつきが明らかにされた。

キーワード：自己評価感情、自己概念、自己像の不安定性

#### 問題と目的

人は全体的な自己に対する評価をしばしば行う。その過程においては、自己の肯定的な側面と否定的な側面を評価していると考えられている（Rosenberg, 1965）。溝上（1999）は、肯定的自尊感情が高く否定的自尊感情が低い人や肯定的自尊感情が低く否定的自尊感情が高い人だけでなく、肯定的自尊感情も否定的自尊感情もともに高い人や低い人もいるという指摘をしており、肯定的な側面と否定的な側面を区別する必要があることを示唆している。

また、自己評価の際には、自分自身の基準と比較して評価する場合と他者や社会の基準と照らし合わせて評価する場合とがある。例えば、テストで60点をとっ

た子どもが自分の目標としていた点数の基準をもとに自己評価するか、それとも他の子どもの点数と比較した結果をもとに自己評価するかという違いである。前者は個人基準の自己評価と呼ばれ、後者は社会基準の自己評価と呼ばれている（溝上, 1999）。溝上（1999）は、同じように自分の基準を満たして満足している人の中でも、社会的な基準を満たしている人と満たしていない人がいることから、個人基準の自己評価と社会基準の自己評価を区別して考える必要があることを示唆している。

原田（2015）では、このような自己評価の捉え方を踏まえたうえで、自己評価の肯定的側面および否定的側面、個人基準および社会基準の観点から自己評価を測定する尺度を作成している。個人基準－肯定的自己

評価は自己受容と、個人基準－否定的自己評価は自己萎縮と、社会基準－肯定的自己評価は優越感・有能感と、社会基準－否定的自己評価は否定的評価懸念とそれぞれ高い正の相関を示し、尺度の妥当性が示されている。

### 適応指標としての自尊感情

個人基準の自己評価感情は、自尊感情とも呼ばれている (Rosenberg, 1965)。自尊感情については膨大な研究が蓄積されており、それらの研究結果を統合するメタ分析も実施されつつある (e.g., 岡田・小塩・茂垣・脇田・並川, 2015; 小塩・脇田・岡田・並川・茂垣, 2016)。自尊感情は、適応指標として用いられることが多く、不安や抑うつ (Pyszczynski & Greenberg, 1987)、幸福感 (Diener & Diener, 1995) といった精神的健康や、いじめ (Andreou, 2000)、不登校 (粕谷・河村, 2004) といった社会的適応と関係していることが示されてきた。一般的に自尊感情が高いことは適応的であるとされている。しかし、自尊感情が不安定な場合には、自尊感情の高さが怒りや攻撃行動に向かわせることもあると指摘されている (Kernis, Grannemann, & Barclay, 1989)。このような結果より、自尊感情の高さではなく、自尊感情の揺れに着目している研究もみられる (原田, 2008; 市村 (阿部), 2011)。

自尊感情が変動する理由としては、自己像が不安定であること (小塩, 2001)、自己概念が乏しいこと (Kernis, Whisenhunt, Waschull, Greenier, Berry, Herlocker, & Anderson, 1998)、個人が価値を置いて重要視している自己概念の領域に関係する出来事が生じること (Crocker, 2002) などが挙げられている。

原田 (2008) は、大学生を対象に、自尊感情の揺れに影響すると考えられる肯定的自己概念と否定的自己概念について検討を行い、肯定的自己概念の領域数が多い人は、肯定的自尊感情が揺れやすい一方で、否定的自己概念の多い人、安定した否定的自己概念数の多い人、否定的自己概念の領域数の多い人は、否定的自尊感情は揺れにくいことを示している。さらに、肯定的な自己概念と否定的な自己概念が相まって肯定的な自尊感情の揺れに影響を及ぼす可能性も示唆している。

ところで、前青年期においては自己概念が個人の内面的なものへと移行する発達的变化を迎える (Montemayor & Eisen, 1977)。この時期は、自己評価や自己像が不安定であるので、精神的健康を保ち、社会的適応を図ることに、ひととき影響が出やすいと考えられる。例えば、原田 (2016) では、中学生を対象とした縦断研究で、5月時における登校嫌悪感が9月における登校嫌悪感を予測するものの個人基準の肯定的自己評価感情が高ければ、登校嫌悪感の持続を緩和させる効果があることを示している。さらに、いじめ被害経験がある生徒の自己像が不安定であると、いじめ

加害行動へ移る可能性があることも示している。

### 自己評価の発達差と性差

小学校高学年頃には、自己の肯定的側面も否定的側面も既に評価できるようになっていることが示唆されている (佐久間 (保崎)・遠藤・無藤, 2000)。また、山本・田上 (2003) では、小学校高学年においても、重視している特性を当人がどのくらい肯定できているかが、自尊感情の程度により強く関わっていることを示し、小学校高学年生の段階で既に自分にとって重要な意味をもつ特性が意識されていると考察している。

川畑・石川・近森・石岡・春木・島井 (2002) は、小学校4年生から中学校3年生までの自尊感情を測定したところ、小学校では性差がないものの、中学校では総じて男子の方が女子よりも高くなる結果が得られている。そして、このような結果が得られたのは、小学生の女子と比べて中学生の女子の自尊感情が下がっていることが原因であると指摘されている。

外山 (2006) は小学校4年生、6年生、中学2年生が行う社会的比較によって生じる感情や行動の変化について比較したところ、自己卑下に関しては、女子の方が男子より高く、中学2年生や小学校6年生の方が、小学校4年生よりも高い結果が得られた。すなわち、他者と比べて行う自己評価についても、個人基準で行う自己評価と同様な結果を得ている。

このように、自己評価については、とりわけ女子は小学校高学年頃から中学校にかけて否定的な見方が強まり、自己評価が低下し始めると考えられる。そこで、本研究では、発達段階や性差を考慮し、小学校高学年男子、小学校高学年女子、男子中学生、女子中学生に分けて検討を行うこととする。

### 本研究の目的

以上から、本研究の目的は、原田 (2008) の研究デザインを基本とし、小学校高学年男子、小学校高学年女子、男子中学生、女子中学生に分けたうえで、肯定的および否定的な自己概念や自己像の不安定性と、自己評価の個人基準－社会基準の次元および肯定的－否定的の次元を踏まえた自尊感情の揺れや高さとの関連について、明らかにすることである。

仮説は以下の通りである。仮説1から3については原田 (2008) の結果を基に立てられている。仮説4については小塩 (2001) の結果を基に立てられている。肯定的自己概念の領域数が多い群では、個人基準－肯定的自己評価感情や社会基準－肯定的自己評価感情は揺れやすい (仮説1)。否定的自己概念の多い群、安定した否定的自己概念数の多い群、否定的自己概念の領域数の多い群では自己基準－否定的自己評価感情および社会基準－否定的自己評価感情は揺れにくい (仮説2)。肯定的自己概念の領域数が多く、否定的自己概念

の領域数も多い群では、自己基準－肯定的自己評価感情や社会基準－肯定的自己評価感情が揺れやすい（仮説3）。自己像の不安定性が高い群では、個人基準－肯定的自己評価感情や個人基準－否定的自己評価感情が揺れやすい（仮説4）。

## 方法

### 調査手続き

担任教師のもとで、学級単位で質問紙調査を実施した。本調査の実施にあたっては、著者らの所属する大学の研究倫理委員会の審査を受けた。また、各調査校の校長から実施の許可を得た。

### 調査時期

原田（2008）では、3か月間の間に3回の調査を実施したが、本研究では、小中学校での実施ということもあり、児童・生徒の負担を軽減するために、およそ3か月間の間に2回の実施とした。第1回目の調査は2015年9月から10月にかけての期間であり、第2回目の調査は2016年1月であった。

### 調査対象者

第1回目と第2回目の両方に回答したのは、小学校5、6年生505名（男子261名、女子244名）、中学校1～3年生947名（男子465名、女子482名）の計1,452名であった。以降の分析では、この1,452名を対象に行い、欠測値がある者はその都度除外した。

### 質問紙の構成

**短縮版自己評価感情尺度** 原田（2015）の作成した尺度を用いた。短縮版自己評価尺度は個人基準－肯定的自己評価感情因子、個人基準－否定的自己評価感情因子、社会基準－肯定的自己評価感情因子、社会基準－否定的自己評価感情因子の4因子から構成される12項目であった。

**自己像の不安定性** 小塩（2001）がRosenberg（1965）のStability of Self Scaleを基に作成したものである。5項目であった。

短縮版自己評価感情尺度および自己像の不安定性については、あてはまらない（1点）、あまりあてはまらない（2点）、どちらでもない（3点）、ややあてはまる（4点）、とてもあてはまる（5点）の5件法で尋ねた。

TS-WHY（Two-Sided WHY）原田（2008）によるものを一部修正した。まず回答者に自分の中で満足できるところを書いてもらった。回答欄は3つ用意した。次に、書いてもらったそれぞれに対して、日によってどのくらい変化するかについて、全く変化しない（1点）、あまり変化しない（2点）、どちらともいえない（3点）、やや変化する（4点）、大きく変化する（5点）で選択してもらった。回答者に自分の中で満足できないところについても同様に回答を求めた。

## 結果

**短縮版自己評価感情尺度** 因子分析（主因子法、直接オブリミリン回転）を行った。第1回目、第2回目のどちらにおいても原田（2015）と同様な因子構造が確認された。第1因子は個人基準－肯定的自己評価感情、第2因子は個人基準－否定的自己評価感情、第3因子は社会基準－肯定的自己評価感情、第4因子は社会基準－否定的自己評価感情であった。

**自己像の不安定性** 因子分析（主因子法）を行ったところ、第1回目、第2回目のどちらにおいても1因子構造であった。

**尺度の得点化** 短縮版自己評価感情尺度と自己像の不安定性については、それぞれの項目の信頼性係数を算出した（Table 1）。いずれも十分高い値であったので、平均値を算出し、尺度得点とした。各尺度の平均値と標準偏差はTable 1の通りであった<sup>1</sup>。

**自己評価感情の揺れと高さ** 第1回目と第2回目の調査において測定された自己評価感情尺度の標準偏差を自己評価感情の揺れとした。個人基準－肯定的自己評価感情の揺れ、個人基準－否定的自己評価感情の揺れ、社会基準－肯定的自己評価感情の揺れ、社会基準－否定的自己評価感情の揺れの4つを算出した。また、第1回目と第2回目の調査において測定された自己評価感情尺度の平均値を自己評価感情の高さとした。個人基準－肯定的自己評価感情の高さ、個人基準－否定的自己評価感情の高さ、社会基準－肯定的自己評価感情の高さ、社会基準－否定的自己評価感情の高さの4つを算出した。

**自己像の不安定性の高さ** 第1回目と第2回目の調査において測定された自己像の不安定性の平均値を自己像の不安定性の高さとした。

Table 1 短縮版自己評価感情尺度と自己像の不安定性の記述統計量

変数	平均値（標準偏差）	項目数	$\alpha$ 係数
自己基準－肯定的自己評価感情 #1/#2	3.31 (1.04) / 3.29 (1.01)	3	.83/.82
自己基準－否定的自己評価感情 #1/#2	3.81 (0.96) / 3.87 (0.95)	3	.72/.75
社会基準－肯定的自己評価感情 #1/#2	3.42 (1.16) / 3.47 (1.16)	3	.84/.87
社会基準－否定的自己評価感情 #1/#2	2.94 (0.97) / 2.93 (1.01)	3	.72/.77
自己像の不安定性 #1/#2	2.96 (0.89) / 2.93 (0.92)	5	.76/.79

自己概念 TS-WHYにおいて、自分の中で満足できるところと回答されたものを肯定的自己概念、満足できないところと回答されたものを否定的自己概念とした。「ありません」「ないです」「言えません」などの自己概念とは関係のない回答がされたものを除くと第1回目の調査における肯定的自己概念#1は全部で2,109個回答された（1人あたり平均1.45個回答、 $SD=0.97$ ）。否定的自己概念#1については全部で2,163個回答された（1人あたり平均1.49個回答、 $SD=0.96$ ）。第2回目の調査における肯定的自己概念#2は全部で2,147個回答された（1人あたり平均1.48個回答、 $SD=0.93$ ）。否定的自己概念#2については全部で2,199個回答された（1人あたり平均1.51個回答、 $SD=0.94$ ）。第1回目と第2回目の調査で回答された自己概念の数の合計を自己概念延べ数とした。肯定的な自己概念は、肯定的自己概念延べ数、否定的な自己概念は、否定的自己概念延べ数とした。

また、各調査において回答された自己概念のうち、全く変化しない（1点）、あまり変化しない（2点）と回答されたものを、安定自己概念とした<sup>2</sup>。そして、第1回目と第2回目の調査で回答された安定自己概念の数の合計を安定自己概念延べ数とした。肯定的な自己概念は、肯定的安定自己概念延べ数、否定的な自己概念は、否定的安定自己概念延べ数とした。

**自己概念の領域** 原田(2008)のカテゴリーに基づいて自己概念を領域ごとに分類した。カテゴリーは性格、対人態度、人間関係、自信、生活感情、向上心、生活状況、能力、夢、健康、容姿、その他、の12分類とした。まず、第1回目と第2回目の調査で得られた回答を併せて、全体の5%をランダムに抽出し、心理学が専門の研究者3名（著者3名）が独立して分類を行った。3名の平均一致率は73.0%であった。一致率が十分高いとは言えなかったため、協議を行ったうえで、第1回目に行った回答も含めて再度全体の5%をランダムに抽出し、分類を行ったところ、82.2%に上昇した。再び協議を行い、第1、2回目に行った回答も含めて全体の5%をランダムに抽出し、分類を行ったところ、80.8%であった。80%以上の安定した一致率が得られたことと、これ以上の高い一致率が得られることは期待できないとの判断から、著者のうちの1名が全回答を分類した<sup>3</sup>。分類された結果はTable 2の通りであった。

また、肯定的自己概念の領域の数を肯定的自己概念領域数とし、否定的自己概念の領域の数を否定的自己概念領域数とした。第1回目と第2回目の調査で回答された肯定的自己概念の領域数の合計の平均値は1.89 ( $SD=1.03$ )、否定的自己概念の領域数の合計の平均値は1.89 ( $SD=0.97$ )であった。

**学校種差および性差** 自己評価感情の揺れと高さ、自己像の不安定性の高さ、自己概念延べ数（肯定的、否定的）、安定自己概念の延べ数（肯定的、否定的）、自

Table 2 TS-WHYによって測定された自己概念の割合

	肯定的自己概念		否定的自己概念	
	総数	割合	総数	割合
30-40			性格	31.55
20-30	能力	25.35	能力	29.83
	その他	23.03		
	性格	21.15		
10-20	対人態度	16.19	その他	17.56
			対人態度	13.76
0-10	人間関係	6.58	健康	2.29
	生活状況	2.28	容姿	1.72
	生活感情	1.90	人間関係	1.31
	健康	1.32	生活状況	0.87
	容姿	0.99	自信	0.48
	向上心	0.56	向上心	0.32
	夢	0.40	生活感情	0.28
	自信	0.26	夢	0.05

注) 四捨五入を行っているため、合計が100%にならない。単位 (%)

己概念領域数（肯定的、否定的）の学校種差および性差を検討するため、学校種（小学校、中学校）と性別（男、女）を要因とする2要因調査対象者間分散分析を行った（Table 3）<sup>4</sup>。

**自己評価感情尺度間の相関** 自己評価感情の揺れと高さ（個人基準－肯定的、個人基準－否定的、社会基準－肯定的、社会基準－否定的）の相関係数を算出した。小学校高学年男子、小学校高学年女子、男子中学生、女子中学生の4つに分けて相関係数を算出した（Table 4）。

**自己概念と自己像の不安定性、自己評価感情の関連**

まず、自己概念延べ数(肯定的、否定的)、安定自己概念延べ数(肯定的、否定的)、自己概念領域数(肯定的、否定的)から検討を行う。これらの変数は、高い相関が示されたことから、同時に分析モデルに投入することは望ましくない。そこで、別に独立変数とするモデルを構成した。自己概念延べ数(肯定的、否定的)、安定自己概念延べ数(肯定的、否定的)、自己概念領域数(肯定的、否定的)は、それぞれ平均値を基準に多い群と少ない群に分けた。従属変数は、自己評価感情の揺れと高さ(個人基準－肯定的、個人基準－否定的、社会基準－肯定的、社会基準－否定的)であった（Table 5～7）。

次に、自己像の不安定性の高さから検討を行う。自己像の不安定性の高さについて平均値を基準に高群と低群に分けた。そして、高群と低群で自己評価感情の揺れと高さ(個人基準－肯定的、個人基準－否定的、社会基準－肯定的、社会基準－否定的)で平均値差の検定を行った（Table 8）。

## 考察

本研究では、前青年期の小学校高学年児童および中学生を対象に、肯定的および否定的自己概念や自己像の不安定性と、自己基準－社会基準の次元と肯定的－

Table 3 学校種および性別ごとの尺度の平均値と分散分析結果

変数	小学校		中学校		学校種差	F値 性差	交互作用	単純主効果
	男子	女子	男子	女子				
個人基準－肯定的自己評価感情の揺れ	0.46	0.42	0.38	0.38	5.93*	0.86	0.49	
個人基準－否定的自己評価感情の揺れ	0.52	0.47	0.42	0.35	20.00**	6.74*	0.10	
社会基準－肯定的自己評価感情の揺れ	0.53	0.43	0.44	0.45	1.58	2.50	3.94*	小女<小男**, 中男<小男*
社会基準－否定的自己評価感情の揺れ	0.52	0.48	0.44	0.42	7.37**	1.38	0.34	
個人基準－肯定的自己評価感情の高さ	3.52	3.54	3.30	3.06	45.86**	4.78*	6.27*	中女<中男, 中男<小男 中女<小女*
個人基準－否定的自己評価感情の高さ	3.50	3.65	3.80	4.15	76.85**	30.03**	4.04*	小男<小女**, 中男<中女** 小男<中男**, 小女<中女**
社会基準－肯定的自己評価感情の高さ	3.66	3.61	3.45	3.25	23.67**	4.48*	1.51	
社会基準－否定的自己評価感情の高さ	2.78	2.89	2.83	3.14	8.99**	19.55**	4.70*	中男<中女**, 小女<中女**
肯定的自己概念延べ数	2.82	3.30	2.82	2.92	4.27*	10.40**	4.22*	小男<小女**, 中女<小女*
否定的自己概念延べ数	2.35	2.80	2.89	3.57	56.11**	42.44**	1.77	
肯定的安定自己概念延べ数	1.89	2.38	2.12	2.11	0.05	7.13**	7.88**	小男<小女**, 中女<小女*
否定的安定自己概念延べ数	1.35	1.74	1.92	2.43	49.20**	24.91**	0.40	
肯定的自己概念領域数	1.71	2.17	1.84	1.89	1.88	20.48**	12.78**	小男<小女**, 中女<小女*
否定的自己概念領域数	1.55	1.89	1.83	2.14	25.91**	38.69**	0.08	

\*\* $p<.01$  \* $p<.05$

Table 4 自己評価感情尺度間の相関係数 (小学生/中学生)

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)
(1) 個人基準－肯定的自己評価感情の揺れ	1/1	.10/.10*	.14*/.17**	.20**/.04	-.22**/-.08	-.09/.15**	-.15*/-.04	.08/.10*
(2) 個人基準－否定的自己評価感情の揺れ	.05/.06	1/1	.04/-.01	.23**/.25**	.06/.10*	-.25**/-.35**	.05/.05	-.15*/-.14**
(3) 社会基準－肯定的自己評価感情の揺れ	.15*/.15**	.06/.07	1/1	.23**/.06	-.27**/-.18**	.12/.13**	-.21**/-.08	.19**/.12**
(4) 社会基準－否定的自己評価感情の揺れ	.05/.14**	.18**/.18**	.12/.29**	1/1	-.09/-.08	.05/.15**	-.11/-.03	.05/.07
(5) 個人基準－肯定的自己評価感情の高さ	-.17**/-.08	.13*/.02	-.15*/-.10*	-.02/-.03	1/1	-.37**/-.32**	.47**/.64**	-.46**/-.55**
(6) 個人基準－否定的自己評価感情の高さ	.08/.12**	-.24**/-.24**	.17**/.03	.00/.01	-.35**/-.38**	1/1	-.10/-.09	.48**/.45**
(7) 社会基準－肯定的自己評価感情の高さ	-.08/-.03	.03/.00	-.36**/-.17**	-.10/-.12**	.70**/.63*	-.22**/-.18**	1/1	-.40**/-.49**
(8) 社会基準－否定的自己評価感情の高さ	.16**/.16**	-.11/-.10*	.17**/.20**	.04/.06	-.58**/-.55**	.52**/.46**	-.53**/-.48**	1/1

注) 対角より上段が男子, 下段が女子

\*\* $p<.01$  \* $p<.05$

否定的の次元を踏まえた自己評価の揺れや高さとの関連を明らかにすることが目的であった。

#### 自己評価感情の揺れと高さの相関関係 (Table 4)

自己評価感情の揺れと高さの相関関係は、全体的に中程度以下の相関を示したので、別に理解する必要が有ると考えられる。同一次元同士の自己評価感情の高さに関しては、個人基準と社会基準との自己評価感情間で高い相関がみられた。一方で、同一次元同士の自己評価感情の揺れに関しては、個人基準と社会基準との自己評価感情間で弱い正の相関が見られた。また、肯定的自己評価感情の高さと否定的自己評価感情の高さは、中程度の負の相関がみられた一方で、肯定的自己評価感情の揺れと否定的自己評価感情の揺れは無相関あるいは弱い正の相関がみられた。この結果から、自己評価感情の高さについては、肯定的側面が高ければ否定的側面は低いといったように肯定次元と否定次元との間で相反する強い関連性があるのに対し、自己評価感情の揺れについては、肯定的側面が揺れても、否定的側面は揺れない、もしくは否定的側面も揺れるといったように、肯定次元と否定次元との間での関連性が低い可能性が示唆された。

#### 自己評価感情の揺れについて (Table 3, 5~7)

自己評価感情の揺れについては、女子の社会基準－肯定的自己評価感情の揺れを除いて、いずれも小学校高学年の方が中学生よりも揺れが大きい結果が得られた。Meier, Orth, Denissen, & Kühnel (2011) では、13歳から72歳を対象とした調査で、年齢が上がるほど、自尊感情は安定することを示している。Meier, et al. (2011) では、13歳未満は対象になっていなかったが、年齢が上がるほど安定することは小学校高学年生にもあてはまると考えられる。性差については、個人基準－否定的自己評価感情において男子の方が女子よりも揺れることが示された。この結果は、女子中学生の個人基準－否定的自己評価感情の揺れが小さいことによるものであると考えられる。女子中学生は、ひとたび自分の基準に基づいて自己を否定的に捉えたと、それが持続する傾向にあるといえるだろう。

肯定的自己概念の領域数が多いほど、個人基準－肯定的自己評価感情や社会基準－肯定的自己評価感情は揺れやすい(仮説1)については、仮説を支持しなかった。むしろ、仮説とは反対の結果が得られている。小学校高学年男子では社会基準－肯定的自己評価感情が揺れにくいという結果が得られた。また、女子中学生では、否定的自己概念領域数が少ない人の中で、肯定的自己概念領域数が多い群では社会基準－肯定的自己

Table 5 自己概念延べ数（肯定的、否定的）の多少による自己評価感情の分散分析結果

変数		肯定的自己概念延べ数 (少)		肯定的自己概念延べ数 (多)		F値		交互作用	単純主効果
		否定的自己概念延べ数 (少)	否定的自己概念延べ数 (多)	否定的自己概念延べ数 (少)	否定的自己概念延べ数 (多)	肯定的自己概念延べ数主効果	否定的自己概念延べ数主効果		
個人基準 - 肯定的自己評価感情の揺れ	小男	0.40	0.65	0.45	0.57	0.04	5.22*	0.65	
社会基準 - 肯定的自己評価感情の揺れ	小男	0.56	0.86	0.42	0.57	5.46*	5.68*	0.73	
	中女	0.45	0.55	0.37	0.45	4.05*	3.67	0.04	
社会基準 - 否定的自己評価感情の揺れ	小男	0.55	0.73	0.46	0.51	4.18*	2.35	0.63	
	中男	0.46	0.52	0.33	0.48	3.07	4.14*	0.65	
個人基準 - 肯定的自己評価感情の高さ	小男	3.43	2.46	3.89	3.27	15.87**	25.15**	1.20	
	小女	3.27	1.86	3.93	3.55	64.32**	37.50**	12.31**	肯少否少 < 肯多否少** 肯少否多 < 肯多否多** 肯少否多 < 肯少否少** 肯多否多 < 肯多否少**
	中男	3.06	2.72	3.64	3.53	50.82**	5.38*	1.36	
	中女	2.94	2.39	3.42	3.26	65.31**	18.20**	5.60*	肯少否少 < 肯多否少** 肯少否多 < 肯多否多** 肯少否多 < 肯少否少**
個人基準 - 否定的自己評価感情の高さ	小男	3.44	4.26	3.24	3.89	3.39	21.97**	0.28	
	小女	3.53	4.50	3.35	4.02	5.71*	34.88**	1.15	
	中男	3.75	4.28	3.57	4.01	5.66*	25.99**	0.29	
	中女	4.15	4.41	3.78	4.22	17.43**	26.24**	1.80	
社会基準 - 肯定的自己評価感情の高さ	小男	3.41	2.83	4.08	3.61	20.23**	10.39**	0.12	
	小女	3.36	1.99	3.93	3.71	50.47**	23.37**	11.90**	肯少否少 < 肯多否少** 肯少否多 < 肯多否多** 肯少否多 < 肯少否少**
	中男	3.10	2.88	3.96	3.68	47.55**	4.18*	0.08	
	中女	3.03	2.64	3.59	3.52	53.56**	5.38*	2.78	
社会基準 - 否定的自己評価感情の高さ	小男	2.82	3.21	2.54	3.07	2.11	10.10**	0.25	
	小女	3.02	3.94	2.61	2.97	24.02**	20.66**	3.96*	肯多否少 < 肯少否少** 肯多否多 < 肯少否多** 肯少否少 < 肯少否多** 肯多否少 < 肯多否多**
	中男	2.94	3.42	2.53	2.76	27.93**	12.47**	1.61	
	中女	3.22	3.64	2.84	3.02	36.76**	13.30**	2.04	

\*\* $p < .01$  \* $p < .05$

Table 6 安定自己概念延べ数（肯定的、否定的）の多少による自己評価感情の分散分析結果

変数		肯定的安定自己概念延べ数 (少)		肯定的安定自己概念延べ数 (多)		F値		交互作用	単純主効果
		否定的安定自己概念延べ数 (少)	否定的安定自己概念延べ数 (多)	否定的安定自己概念延べ数 (少)	否定的安定自己概念延べ数 (多)	肯定的安定自己概念延べ数主効果	否定的安定自己概念延べ数主効果		
個人基準 - 肯定的自己評価感情の揺れ	小男	0.41	0.62	0.36	0.43	3.52*	5.01*	1.11	
	中男	0.36	0.40	0.29	0.45	0.04	5.54*	2.50	
社会基準 - 肯定的自己評価感情の揺れ	小男	0.54	0.73	0.28	0.42	15.55**	5.50*	0.15	
	中男	0.50	0.46	0.37	0.37	6.12*	0.15	0.10	
	中女	0.42	0.51	0.27	0.45	3.75	6.67*	0.89	
社会基準 - 否定的自己評価感情の揺れ	小男	0.51	0.64	0.46	0.41	5.31*	0.38	2.34	
	中男	0.46	0.49	0.37	0.38	5.00*	0.14	0.05	
個人基準 - 肯定的自己評価感情の高さ	小男	3.57	2.86	4.10	3.85	39.07**	15.78**	3.62	
	小女	3.44	2.89	4.13	3.68	42.78**	19.40**	0.23	
	中男	3.23	2.88	3.92	3.61	78.18**	16.84**	0.09	
	中女	2.99	2.80	3.71	3.31	42.96**	10.10**	1.23	
個人基準 - 否定的自己評価感情の高さ	小男	3.33	3.93	3.04	3.64	5.56*	23.59**	0.00	
	小女	3.53	4.11	3.10	3.87	10.32**	40.99**	0.76	
	中男	3.57	4.10	3.47	3.93	3.07	40.20**	0.20	
	中女	4.04	4.32	3.60	4.18	7.25*	33.60**	3.97*	肯多否少 < 肯少否少** 肯少否少 < 肯少否多** 肯多否少 < 肯多否多**
社会基準 - 肯定的自己評価感情の高さ	小男	3.58	3.22	4.29	3.96	33.07**	7.48**	0.01	
	小女	3.58	2.81	4.09	3.89	43.16**	15.91**	5.71*	肯少否少 < 肯多否少** 肯少否多 < 肯多否多** 肯少否多 < 肯少否少**
	中男	3.22	3.12	4.11	3.81	61.23**	3.74	0.99	
	中女	3.14	2.93	4.01	3.59	51.82**	8.96*	0.99	
社会基準 - 否定的自己評価感情の高さ	小男	2.80	3.07	2.19	2.83	14.54**	17.22**	2.75	
	小女	3.04	3.36	2.41	2.74	36.12**	9.87**	0.01	
	中男	2.79	3.19	2.40	2.64	31.27**	14.23**	0.84	
	中女	3.19	3.31	2.56	3.05	24.26**	11.27**	4.09*	肯多否多 < 肯少否多** 肯少否少 < 肯少否多** 肯多否少 < 肯多否多**

\*\* $p < .01$  \* $p < .05$

Table 7 自己概念領域数（肯定的、否定的）の多少による自己評価感情の分散分析結果

変数		肯定的自己概念領域数（少）		肯定的自己概念領域数（多）		F値		交互作用	単純主効果
		否定的自己概念領域数（少）	否定的自己概念領域数（多）	否定的自己概念領域数（少）	否定的自己概念領域数（多）	肯定的自己概念領域数主効果	否定的自己概念領域数主効果		
個人基準 - 否定的自己評価感情の揺れ	小男	0.53	0.39	0.49	0.59	1.92	0.08	4.15*	肯少否多<肯多否多*
	小男	0.56	0.77	0.43	0.47	8.90**	3.12	1.47	
社会基準 - 肯定的自己評価感情の高さ	小女	0.56	0.25	0.41	0.43	0.04	4.08**	5.43**	肯少否多<肯少否少* 肯多否少<肯少否少**
	中女	0.55	0.51	0.24	0.44	12.80**	2.43	4.93*	
	小男	3.56	2.85	3.82	3.54	14.93**	16.10**	3.03	
	小女	3.34	2.84	3.89	3.60	21.99**	8.07**	0.54	
個人基準 - 否定的自己評価感情の高さ	中男	3.04	2.88	3.63	3.45	47.50**	3.93*	0.01	
	中女	2.80	2.68	3.46	3.21	36.16**	3.38	0.40	
	小男	3.46	3.75	3.28	3.55	2.25	5.04*	0.01	
	小女	3.50	3.82	3.18	3.86	1.23	15.52**	2.03	
社会基準 - 肯定的自己評価感情の高さ	中男	3.65	4.03	3.55	3.89	2.10	19.65**	0.05	
	中女	4.16	4.32	3.77	4.14	12.77**	11.31**	1.77	
	小男	3.51	3.09	3.97	3.77	20.08**	6.20*	0.76	
	小女	3.45	3.11	3.86	3.66	9.57**	2.98	0.19	
社会基準 - 否定的自己評価感情の高さ	中男	2.97	3.28	3.71	3.62	25.83**	1.08	3.49	
	中女	3.03	2.90	3.43	3.42	15.88**	0.33	0.27	
	小男	2.85	3.08	2.49	2.81	7.62**	6.26*	0.13	
	小女	2.98	3.41	2.59	2.86	12.80**	8.07**	0.29	
	中男	2.95	3.13	2.54	2.77	19.70**	5.69*	0.06	
	中女	3.33	3.36	2.90	3.05	14.46**	1.02	0.40	

\*\* $p<.01$  \* $p<.05$

Table 8 自己像の不安定性の高さの高低による自己評価感情の揺れと高さ（平均値）

変数		自己像の不安定性の高さ（低）	自己像の不安定性の高さ（高）	t値
社会基準 - 否定的自己評価感情の揺れ	中女	0.38	0.47	2.33*
	小女	3.66	3.37	2.34*
個人基準 - 肯定的自己評価感情の高さ	中男	3.41	3.21	2.47*
	中女	3.15	2.95	2.36**
	小男	3.32	3.60	2.34*
	小女	3.33	4.00	6.30**
個人基準 - 否定的自己評価感情の高さ	中男	3.56	4.03	6.19**
	中女	3.96	4.32	5.49**
	中男	3.56	3.35	2.08*
	小男	2.59	2.95	3.40**
社会基準 - 肯定的自己評価感情の高さ	小女	2.69	3.13	4.04**
	中男	2.57	3.06	5.99**
社会基準 - 否定的自己評価感情の高さ	中女	2.97	3.34	4.67**

\*\* $p<.01$  \* $p<.05$

評価感情が揺れにくいという結果も得られている。これらの結果は原田（2008）の研究実施前の仮説を支持するものとなった。自己複雑性理論を採用すれば（Linville, 1985），自己概念の領域が多いことは、たとえ自分の基準で満足がいかない部分があったとしても、他の領域の自己概念が存在することで全体自己への影響を緩衝し、肯定的な自己評価を下げるのが少なくなると考えられる。

否定的自己概念の多い群、安定した否定的自己概念の延べ数の多い群、否定的自己概念の領域数の多い群で個人基準 - 否定的自己評価感情および社会基準 - 否定的自己評価感情は揺れにくい（仮説2）については、仮説を支持しなかった。男子中学生においては、むしろ否定的自己概念延べ数が多いほど、社会基準 - 否定的自己評価感情は揺れやすかった。小学校高学年男子、小学校高学年女子、女子中学生では、有意な差が

一切みられなかったことから、否定的自己概念に関するものと否定的自己評価感情の揺れとは関連がないのかもしれない。

肯定的自己概念領域数が多く、否定的自己概念領域数が多い群では、個人基準 - 肯定的自己評価感情や社会基準 - 肯定的自己評価感情が揺れやすい（仮説3）については、仮説を支持しなかった。仮説1の検討でも示された通り、小学生男子や中学生女子においては肯定的自己概念数の多さは、肯定的自己評価感情揺れにくさと関係していると考えられたが、その他の群では肯定的自己概念領域数は肯定的自己評価感情の揺れに影響を及ぼさないと考えられた。

自己像の不安定性が高いほど、個人基準 - 肯定的自己評価感情や個人基準 - 否定的自己評価感情は揺れやすい（仮説4）については、仮説を支持しなかった（Table 8）。小塩（2001）では、自己像の不安定性が高

いことが、自尊感情変動性に影響を及ぼしていたが、調査期間が1週間であったこと、調査対象者が大学生であったことが、本研究とは異なっている。したがって、変動性を考えるうえでの期間や発達の違いについて、今後は詳細な検討を行っていく必要があるだろう。

#### 自己評価感情の高さについて (Table 3, 5~7)

まず、個人基準、社会基準ともに肯定的自己評価感情の高さは、小学校高学年の方が中学生よりも高かった。また、社会基準-肯定的自己評価感情については、小学校高学年男子の方が小学校高学年女子よりも高く、個人基準では中学校になると男子の方が女子よりも高かった。一方で、否定的自己評価感情の高さは、個人基準では中学生の方が小学校高学年よりも高く、社会基準では女子においてのみ中学校の方が小学校高学年よりも高かった。総じて、小学校高学年の方が中学生よりも、また、男子の方が女子よりも、肯定的な自己評価感情は高く、否定的な自己評価感情は低かった。これらは、川畑他(2002)や外山(2006)を支持する結果であり、小学校高学年から中学3年生にかけて、自己評価感情は否定的になることが改めて示された。

川井・吉田・宮元・山中(2006)では、中学生、高校生と年齢が上がるにつれ、ネガティブな経験をする機会が増える一方で、自己意識の高まりもあることから、自尊感情が低下すると考え、小学生を対象に自尊感情の低下を防ぐ実践的な取り組みを行っている。自尊感情の低下を考えると、小学校高学年段階において、川井他(2006)のような取り組みが行われることは重要であると言えるだろう。

男子については、全般的に肯定的自己概念延べ数、肯定的安定自己概念延べ数、肯定的自己概念領域数、のいずれも多いほど、個人基準、社会基準に関わらず、肯定的自己評価感情が高かった。反対に、全般的に否定的自己概念延べ数、否定的安定自己概念延べ数、否定的自己概念領域数、のいずれも多いほど、個人基準、社会基準に関わらず、否定的自己評価感情が高かった。女子についても、男子と同じ傾向はみられたが、肯定的側面と否定的側面の交互作用効果がみられ、肯定的自己概念と否定的自己概念が自己評価感情に複雑に影響していた。

#### 前青年期の自己概念について

肯定的自己概念延べ数、肯定的安定自己概念延べ数、肯定的自己概念領域数については、女子中学生の方が小学校高学年女子よりも少なくなっていることが示された。また、小学校高学年段階では女子の方が男子よりも多いことが示された。一方で、否定的自己概念延べ数、否定的安定自己概念延べ数、否定的自己概

念領域数については、中学生の方が小学校高学年よりも多く、女子の方が男子よりも多かった。つまり、中学生になるにつれ、否定的な自己概念は増える一方で、さらに女子は小学校段階では男子よりも多かった肯定的自己概念が減っていくことが示唆された。

自己概念の領域については、肯定的自己概念、否定的自己概念ともに、勉強や運動といった能力、性格、他者とのかかわり方に関する対人態度が多くを占めた。自己評価感情を低める要因と予測される容姿については、全体的な割合からすると、多くはなかった。また、今回の分類では、原田(2008)の基準で実施したが、その他に分類されたものが多かったのも特徴であった。その他に分類されていたものの多くは、趣味に関するものであり、前青年期の自己概念領域が大学生のそれとは内容的に異なるものであると考えられた。今後は、前青年期向けの領域カテゴリーの生成を行う必要もあるだろう。

本研究の結果からは、小学校高学年男子では、肯定的自己概念の領域数が多い群が、社会基準-肯定的自己評価感情が揺れにくいという結果が得られた。また、女子中学生では、否定的自己概念の領域数が少ない場合に、肯定的自己概念の領域数が多い群が、社会基準-肯定的自己評価感情が揺れにくいという結果が得られた。これらの結果から、肯定的自己概念の領域が増えると肯定的自己評価感情が揺れにくくなると考えられる。また、男子中学生においては、否定的安定自己概念延べ数が多いほど、社会基準-否定的自己評価感情は揺れやすかったので、自己の中に否定的に思い続ける側面があると、自己と他者を比較した際に、自己否定感情が揺れやすくなる可能性が考えられる。

学校種と性別を分けて検討した結果、自己概念と自己評価感情の関係は異なる様相を示した。これらの結果は、自己評価感情を高めるためには、肯定的側面と否定的側面がそれぞれどのような状態になっているかを理解したうえで、発達段階や性別に応じたきめ細やかな支援を行っていく必要があることを示唆している。

#### 注

- 1) 以降、第1回目の調査における変数を記載する場合は#1、第2回目の調査における変数を記載する場合は#2を付して示す。
- 2) 原田(2008)では、複数回の調査にまたがって表出された自己概念を安定自己概念と呼んでいるが、本研究では1回の調査において回答者によって変化がないと認識している自己概念を安定自己概念とした。この方法は、表出された客観的な一致に基づく安定でなく、回答者の主観に基づく安定を測定している。
- 3) これ以上の高い一致率が得られることは期待できないと判断した理由は、児童・生徒の表現にある。例えば、「運動」「勉強」といった単語のみで回答されているものに代表されるように、それが「勉強ができるところ」のことであるの



- か、「勉強が好きなのところ」であるのかが判別がつかないようなケースが多くみられた。
- 4) 以降の分散分析および $t$ 検定の結果については、有意であったところのみ表に記載した。

## 引用文献

- Andreou, E. (2000). Bully/victim problems and their association with psychological constructs in 8- to 12 year-old Greek schoolchildren. *Aggressive Behavior*, 26, 49-56.
- Crocker, J. (2002). The costs of seeking self-esteem. *Journal of Social Issues*, 58, 597-615.
- Diener, E. & Diener, M. (1995). Cross-cultural correlates of life satisfaction and self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, 68, 653-663.
- 原田宗忠 (2008). 青年期における自尊感情の揺れと自己概念との関係. *教育心理学研究*, 56, 330-340.
- 原田宗忠 (2015). 短縮版自己評価感情尺度の作成. *愛知教育大学教育臨床総合センター紀要*, 5, 1-10.
- 原田宗忠 (2016). いじめ及び不登校傾向に関係する要因—自己像の不安定さと自尊感情に注目した縦断研究を通して—*日本教育大学協会研究年報*, 34, 277-287.
- 市村 (阿部) 美帆 (2011). 自尊感情の高さと変動性の2側面と自尊感情低下後の回復行動との関連. *心理学研究*, 82, 362-369.
- 粕谷貴志・河村茂雄 (2004). 中学生の学校不適応とソーシャル・スキルおよび自尊感情との関連—登校群と一般群との比較— *カウンセリング研究*, 37, 107-114.
- 川畑徹朗・石川哲也・近森けいこ・石岡伸紀・春木敏・島井哲志 (2002). 思春期のセルフエスティーム, ストレス対処スキルの発達と危険行動との関係. *神戸大学発達科学部研究紀要*, 10, 83-92.
- 川井栄治・吉田寿夫・宮元博章・山中一英 (2006). セルフ・エスティームの低下を防ぐための授業の効果に関する研究—ネガティブな事象に対する自己否定的な認知への反駁の促進— *教育心理学研究*, 54, 112-123.
- Kernis, M. H., Grannemann, B. D., & Barclay, L. C. (1989). Stability and level of self-esteem as predictors of anger arousal and hostility. *Journal of Personality and Social Psychology*, 56, 1013-1022.
- Kernis, M. H., Whisenhunt, C. R., Waschull, S. B., Greenier, K. D., Bery, A. J., Herlocker, C. E., & Anderson, C. A. (1998). Multiple facets of self-esteem and their relations to depressive symptoms. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 24, 657-668.
- Linville, P. W. (1985). Self-complexity and affective extremity: Don't put all of your eggs in one cognitive basket. *Social Cognition*, 3, 94-120.
- Meier, L. L., Orth, Denissen, J. J., & Kühnel, A. (2011). Age differences in instability, contingency, and level of self-esteem across the life span. *Journal of Research in Personality*, 45, 604-612.
- 溝上慎一 (1999). 自己の基礎理論—実証的心理学のパラダイム— 金子書房
- Montemayor, R. & Eisen, M. (1977). The development of self-conception from childhood to adolescence. *Developmental Psychology*, 13, 314-319.
- 岡田涼・小塩真司・茂垣まどか・脇田貴文・並川努 (2015). 日本人における自尊感情の性差に関するメタ分析. *パーソナリティ研究*, 24, 49-60.
- 小塩真司 (2001). 自己愛傾向が自己像の不安定性, 自尊感情のレベルおよび変動性に及ぼす影響. *性格心理学研究*, 10, 35-44.
- 小塩真司・脇田貴文・岡田涼・並川努・茂垣まどか (2016). 日本における自尊感情の時間横断的メタ分析—得られた知見とそこから示唆されること— *発達心理学研究*, 27, 299-311.
- Pyszczynski, T. & Greenberg, J. (1987). Self-regulatory perseverance and the depressive self-focusing style: A self-awareness theory of reactive depression. *Psychological Bulletin*, 102, 122-138.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton: Princeton University Press.
- 佐久間 (保崎) 路子・遠藤利彦・無藤隆 (2000). 幼児期・児童期における自己理解の発達—内容的側面と評価的側面に着目して— *発達心理学研究*, 11, 176-187.
- 外山美樹 (2006). 社会的比較によって生じる感情や行動の発達的变化—パーソナリティ特性との関連性に焦点を当てて— *パーソナリティ研究*, 15, 1-12.
- 山本淳子・田上不二夫 (2003). 思春期における自己概念と自尊感情との関連. *筑波大学心理学研究*, 25, 149-161.

## 付記

平成27年度大学教育研究重点配分経費を受けて行われた (代表: 大村恵)。

(2017年8月1日受理)